

# 保険負債の経済価値測定と期待超過利益の会計処理

## Accounting for Insurance Liabilities Measured by Economic Value and Expected Super Profit

川 崎 芙 有

Fuyu Kawasaki

### 要約

本稿では、川崎 [2014] の続編として、会計上、保険負債を経済価値で測定する場合になされる処理を、従来の会計上でなされてきた将来法の処理や経済上の処理と比較しながら検討する。会計上保険負債を経済価値で測定する場合には、期待超過利益の処理が主要な論点になる。期待超過利益の処理として、保険契約締結時点の期待超過利益とこれに対する利子をその他の包括利益（OCI）に計上し、その後、利子分だけ増加している期待超過利益を、保険者の報酬としての確実性・確定性が満たされたときに、その他包括利益（OCI）から利益（純利益）に振り替えるというものが考えられる。期待超過利益というその他の包括利益（OCI）項目は、経済上と会計上の資本・所得（利益）概念の相違を保持しながら、保険負債を経済上と同様の経済価値で測定するために計上されると捉えられる。

### 1. はじめに

昨今、保険会計に関する議論が活発に行われ、そこでは、保険負債を経済的な観点から測定することも検討されており、川崎 [2014] では、こうした動向を理解するために必要となる基礎的な分析を行った。古くから議論されている

ように、会計上の資本・利益概念と経済上の資本・所得概念には、とりわけ超過利益の捉え方に関する相違がある。この点を踏まえて、川崎 [2014] では、保険負債について、従来の会計上の測定と経済上の測定との相違を検討した<sup>1)</sup>。そこでは、会計においては、超過利益は、保険負債を構成する要素の一つであり、保険契約期間中に亘り、徐々に利益認識されるが、一方、経済上は、超過利益は残余概念であり、また、保険契約締結時に見込まれる超過利益額は、資本として維持されるため、所得として認識されないということを述べた。

このような相違があるなかで、保険負債の経済的観点からの測定、すなわち、保険負債の経済価値による測定を会計において導入するとすると、どのような会計処理がなされることになるのだろうか。この点については、川崎 [2014] では、その他の包括利益 (Other Comprehensive Income: OCI) 概念が鍵となるのではないかという言及に止めていた<sup>2)</sup>。そこで本稿では、川崎 [2014] の続編として、保険負債を経済価値で測定する場合の会計処理を検討する。

2. では、当該会計処理について、保険負債に関する従来の会計上の処理や経済上の処理と比較しながら検討を行う。そして、3. では、これまでの議論につき、モデルケースを用いて整理する。

なお、直近では、国際会計基準審議会 (IASB: International Accounting Standards Board) によって、保険契約の会計基準である IFRS 17 (International Financial Reporting Standard 17: 国際財務報告基準第 17 号) (IASB [2017]) が公表された。そこで規定されている保険負債の測定方法は、以前に公表された ED (Exposure Draft: 公開草案) (IASB [2013a]) における提案から、基本的なところにおいては変更がないと捉えられる<sup>3)</sup>。これらの公表物での保険負債の測定値というのは、その経済価値を表しているものではなく<sup>4)</sup>、むしろ、従来の会計においてなされてきたものと同様、簡潔に捉えれば、保険契約者 (集団) からの受領額を意味していると考えられる<sup>5)</sup>。このような基準が公表されたことで、保険負債の測定に関する議論はひとまず沈静化すると考えられるが<sup>6)</sup>、本稿では、かりに、会計において、保険負債を経済価値で測定するとすれば、どのような会計処理がなされることになるのかという点について検討していきたい。

## 2. 会計における保険負債の経済価値測定

### (1) 保険負債の捉え方、測定属性及び測定方法

まず、保険負債を経済的な観点から測定する場合における、保険負債の捉え方、測定属性及び測定方法について、その概要を述べる<sup>7)</sup>。

経済的な観点によると、保険負債は、保険契約という「リスクのある投資」を表す勘定として捉えられ、その投資の有する価値（主観価値）で測定されることが考えられる。これは、保険契約が有する経済的な価値（経済価値）を意味する。

「リスクのある投資」の価値は、確実性等価法という方法により算定され、この金額を VCE と表記する<sup>8)</sup>。VCE は、割引計算を意味する分母を  $(1 + \text{利子率})$  と表現すると、2.1.1 式ようになる。利子率は貨幣の時間価値を反映している。割り引く期間を示す累乗の指数はケースにより異なるため、ここでは省略する。また、この式の RP というのは、リスク・プレミアム (Risk Premium) の略記である。これは、保険契約に係る不確実性を引き受けることに対する保険者の不可欠な報酬であり、正常利益に該当する。

$$\text{VCE} = \text{将来の保険料収入額} / (1 + \text{利子率}) - \text{将来の保険金支払額} / (1 + \text{利子率}) - \text{RP} / (1 + \text{利子率}) \cdots 2.1.1$$

### (2) 保険契約締結時の処理

#### ① 保険負債と期待超過利益 (OCI) の処理

上記のように、保険負債の経済価値は、保険契約という投資の価値額である VCE で測定されるが、経済上は、こうして測定された保険負債の相手勘定として資本が対応することになる<sup>9)</sup>。つまり、保険契約締結時点の保険契約の投資価値を  $\text{VCE}_0$  とすると、つぎのような処理がなされる<sup>10)</sup>。

[保険負債  $\text{VCE}_0$  / 資本  $\text{VCE}_0$ ]

$\text{VCE}_0$  というのは、保険負債の測定値であると同時に、保険者の主観価値としての資本<sup>11)</sup>の測定値でもある。保険者の資本は、保険契約期間中に亘って、保険契約締結時の  $\text{VCE}_0$  の金額を維持すると考えられ<sup>12)</sup>、従って、当該金額が所得（利益）として認識されることはない。

このように、経済上は、保険契約締結時点において、保険負債とともに資本が計上され、また、保険契約締結時点の保険契約の価値  $VCE_0$  は、保険契約期間中に亘り資本として維持されるため所得（利益）として認識されない。

では、会計上保険負債を経済価値で測定する場合には、どのような処理が考えられるだろうか<sup>13)</sup>。ここでまず、保険契約締結時点（0 時点）における保険契約という投資の価値である  $VCE_0$  の意味について検討する。保険契約から保険者が稼得する利益を、正常利益（RP）と超過利益（Super Profit: SP）に分類する<sup>14)</sup>と、保険契約の締結時点の  $VCE_0$  は、保険者が保険契約の遂行により保険契約期間中の各期に稼得すると見込む超過利益の現在価値額を意味すると考えられる<sup>15)</sup>。超過利益とは、保険契約に係る不確実性を引き受けることに対する保険者の不可欠な報酬である正常利益（RP）を超えて、保険者が報酬として上乗せしている部分を指す<sup>16)</sup>。

この超過利益は、会計上の考え方では、経済上の考え方のように資本として維持されるものではなく、正常利益とともに保険者の利益として認識されることになる。会計上、保険者の報酬としての確実性・確定性が高まった時点が、利益の認識の時点になると考えられる。会計上の利益には、処分可能利益や業績表示利益があるが、本稿では処分可能利益を前提とすると、保険者の報酬が利益として認識される時点は、その稼得が確実となり、またその金額が確定するときであり、当該時点は、保険契約期間中の各期の保険金額確定時であると考えられる<sup>17)</sup>。

従って、会計上、保険契約締結時点において保険負債を経済価値  $VCE_0$  で測定する場合、この金額は、維持される資本ではないため資本（金）として計上されることは適切ではなく、また、当該時点では期待される保険者の報酬であるため、この時点の利益として計上されることも適切ではない。

つまり、保険契約締結時点の保険契約の経済価値である  $VCE_0$  は、会計上、維持される資本ではなく、また、当該時点の利益でもない。それは、当該時点においては、保険契約から得られると見込まれる超過利益の現在価値であり、当該時点以降保険契約が遂行される保険契約期間の各期の利益であると考えられる。このような利益をどのように会計処理するのかということが重要な論点

となる。

ここで考えられるのが、こうした利益を、保険契約締結時点においてその他の包括利益（OCI）の一項目として計上し、その後、保険契約期間の各期に亘りその他の包括利益（OCI）から利益（純利益）に振り替えるというものである。つまり、維持される資本でもその時点の利益でもない項目が生じた場合に、一旦その他の包括利益（OCI）に計上し、利益として認められる時点が到来したら、その他の包括利益（OCI）から利益（純利益）への振替を行うという会計処理がなされる。

従って、このようなその他の包括利益（OCI）項目を「期待超過利益」と表すとすれば、保険契約締結時点ではつぎの会計処理が行われる。

[保険負債  $VCE_0$ ／期待超過利益  $VCE_0$ ]

ただし、保険負債は、通常、貸方の項目と考えられる。よって、 $VCE_0$  にマイナスの符号を付して、以下のような会計処理がなされる。

$$\left[ \begin{array}{l} - / \text{ 保険負債 } -VCE_0 \\ \text{ 期待超過利益 } VCE_0 \end{array} \right]$$

川崎 [2014] 51 頁では、保険契約締結時点において、従来の会計でなされている処理（将来法を前提）と経済上の処理とを比較しているが、この二者と、いま検討した、会計上保険負債を経済価値で測定する場合の処理とを比較すると、つぎの図表 1 のようになる。

図表 1 保険契約締結時における貸方の処理—三者比較—

従来の会計上の処理（将来法）	会計上保険負債を経済価値で測定する場合の処理	経済上の処理
$- / \text{ 保険負債 } 0 \leftarrow \left[ \begin{array}{l} - / \text{ 保険負債 } -VCE_0 \\ \text{ 期待超過利益 } VCE_0 \end{array} \right]$ $(=-VCE_0 + VCE_0)$	$- / \text{ 保険負債 } -VCE_0$ $\text{ 期待超過利益 } VCE_0$	$- / \text{ 保険負債 } -VCE_0$ $\text{ 資本 } VCE_0$

従来の会計では、保険負債を保険者の元手（調達源泉）とみて、償却収入（あるいは借換収入）という属性で測定していると捉えられ、そして、その測定方

法には、過去法と将来法の二つがあると考えられる<sup>18)</sup>が、ここでは、将来法を前提とする。図表1から明らかであるように、従来の会計では、予想される超過利益の現在価値は保険負債の一部を構成し、その結果、保険契約締結時点において保険負債の測定値は0となる<sup>19)</sup>。これは、保険契約締結時点では、保険契約者(集団)からの保険料受領額が0であることを示していると考えられる。一方、経済上は、既述のように、保険契約締結時点において、保険負債と資本とが同額で計上される。その金額は、保険契約締結時点での保険契約という投資の価値(経済価値)であり、これは、当該時点において保険契約から見込まれている超過利益の現在価値を意味している。

このように、保険契約から得られると見込まれる超過利益の現在価値が、従来の会計上は保険負債の一部となる一方、経済上は資本となる。ここで、会計上保険負債を経済価値で測定する場合、期待超過利益を保険負債に含めると、保険負債は経済価値で測定されないことになるため適切ではなく、また期待超過利益は会計上資本として維持されるものではないため資本(金)として計上することも適切ではない。さらに、期待超過利益は、保険契約締結時点では保険者の報酬として稼得されてはいないので、その時点の利益(純利益)とすることも適切ではない。そこで、当該時点では、期待超過利益という勘定を用いて、その他の包括利益(OCI)の一つの項目として計上しておく<sup>20)</sup>。そして、その後の保険契約期間において、保険者が報酬を稼得したと認められる時点で、その他の包括利益(OCI)の一項目である期待超過利益からその期の利益(純利益)に振り替えるということが考えられる<sup>21)</sup>。

この会計処理を行うことで、会計上、保険負債を経済価値で測定しつつ、会計における資本と利益の概念を堅持することができる。こうした処理を可能にするため、「期待超過利益」という将来の予想される利益を、利益(純利益)として認められるまで「保存<sup>22)</sup>」しておく場所として、その他の包括利益(OCI)が使用されることが考えられる<sup>23)</sup>。

## ② 有価証券の処理<sup>24)</sup>

保険契約により受領した保険料は、債券などの有価証券に投下され、その後保険金の支払や認識した利益の配当の原資を確保するために、有価証券の一部

を償還することになる。こうした有価証券についても、保険契約締結時点において、将来の有価証券への投下額や有価証券の償還額などを見積って測定する場合、この測定値はつぎようになる。なお、割り引く期間を示す累乗の指数は、ケースにより異なるため、ここでも省略する。

$$\text{有価証券} = -\text{将来の保険料収入額} / (1 + \text{利子率}) + \text{将来の保険金支払額} / (1 + \text{利子率}) \\ + \text{RP} / (1 + \text{利子率}) + \text{SP} / (1 + \text{利子率}) \cdots 2.2.1$$

保険者は、保険料を受領すると、これを有価証券に投下するので、キャッシュアウトフローが生じることになり、従って、第1項にはマイナスの符号が付される。反対に、保険金を支払ったり、利益認識額を配当したりするときには、有価証券を償還するので、キャッシュインフローが生じる。従って、上記の式の第2～4項は、プラスの符号となる<sup>25)</sup>。

ここで、2.2.1 式の第1～3項は、2.1.1 式にマイナスの符号を付したものであるから、保険契約締結時点では  $-VCE_0$  と表現される。また、2.2.1 式の第4項は、保険契約から見込まれる超過利益の現在価値、すなわち、期待超過利益を指すが、これは既述のように、契約締結時点においては  $VCE_0$  と同値である。従って、2.2.1 式はつぎようになる。

$$\text{有価証券} = -VCE_0 + VCE_0 = 0 \cdots 2.2.2$$

これは、超過利益も利益として認識し配当する場合、つまり、会計上の有価証券の測定値である。一方、経済上は、所得として認識し配当されるのは、RP と当初の経済価値  $VCE_0$  に利子率を乗じた金額であり<sup>26)</sup>、 $VCE_0$  は資本として維持される。この  $VCE_0$  に対応する有価証券も、保険契約終了時に満期償還され、当該金額が配当されずに保険者の手元に残るとすると、経済上、保険契約締結時点の有価証券は、以下のように測定される。

$$\text{有価証券} = -\text{将来の保険料収入額} / (1 + \text{利子率}) + \text{将来の保険金支払額} / (1 + \text{利子率}) \\ + \text{RP} / (1 + \text{利子率}) + VCE_0 \times \text{利子率} / (1 + \text{利子率}) + VCE_0 / (1 + \text{利子率}) \cdots 2.2.3$$

この式の第1～3項は、2.1.1 式より、保険契約締結時点では  $-VCE_0$  と表現され、また、第4～5項は、まとめると  $VCE_0$  となる。従って、2.2.3 式は、2.2.4 式になる。

$$\text{有価証券} = -VCE_0 + VCE_0 = 0 \cdots 2.2.4$$

2.2.2 式及び 2.2.4 式から分かるように、保険契約締結時点においては、会計上も経済上も、有価証券の測定値は 0 となる。これを仕訳として表すと、つぎのようになる。

$$\left( \begin{array}{c} \text{有価証券} \quad -VCE_0 \\ \text{有価証券} \quad VCE_0 \end{array} \middle/ \begin{array}{c} - \\ - \end{array} \right) \rightarrow [\text{有価証券} \quad 0 \middle/ -]$$

### ③ 小括

これまで検討してきた内容をまとめると、保険契約締結時点の会計処理について、図表 2 のように整理される。

図表 2 保険契約締結時点の借方・貸方の処理—三者比較—

従来の会計上の処理（将来法）	会計上保険負債を経済価値で測定する場合の処理	経済上の処理
有価証券 0 / 保険負債 0	有価証券 0 / 保険負債 $-VCE_0$ 期待超過利益 $VCE_0$	有価証券 0 / 保険負債 $-VCE_0$ 資本 $VCE_0$

## （３）保険契約期間の各期末の処理

### ① 利息の処理

保険契約期間が開始され<sup>27)</sup>、第 1 期首に保険料を受領し、すぐに有価証券に投下することを想定する。1 期間経過後の第 1 期末には、この投下額に利子率を乗じた分だけ利息が発生し、有価証券が増加する。この有価証券に対する利息は一定期間の運用に対する利殖分であり、保険者の利益となる。また、第 1 期首の保険料受領時には、保険契約締結時の保険負債の測定値から受領した保険料が剥落することによって、受領した保険料だけ保険負債が増加する<sup>28)</sup>。その後 1 期間が経過すると、保険金の支払が各期末であることを想定すれば<sup>29)</sup>、第 1 期の期末には、当初の保険負債の測定値から受領した保険料を取り除いた金額に利子率を乗じた分だけ利息が発生し、保険負債が増加する。この利息分は、当期の保険者の負担になり、費用として計上される。さらに、保険契約締



結時に保険契約期間において見込まれる超過利益の現在価値（当該時点では、保険契約の経済価値と同値）で測定されている期待超過利益も、1 期間の経過により利息が発生し、増加する。この利息分も、当期の保険者の負担となり、費用として計上される<sup>30)</sup>。

例えば、保険契約締結後、第 1 期の期首に受領する保険料を  $P_1$  とし、また、各勘定に適用される利子率を、単純化のため一律に  $i$  とする。第 1 期首に保険料を受領し、これを債券などの有価証券に投下すると、有価証券の測定値は、保険契約締結時点における  $0 (= -VCE_0 + VCE_0)$  から、保険料  $P_1$  の有価証券への投下により期待が事実へと変化したことに伴い  $P_1$  が有価証券から剥落するため、 $P_1 (= (-VCE_0 + P_1) + VCE_0)$  になる。また、保険契約締結時点において、 $-VCE_0$  で測定されていた保険負債について、保険料  $P_1$  の受領により期待が事実へと変化した、変化した部分  $P_1$  が保険負債から剥落するから、その測定値は  $-VCE_0 + P_1$  となる。

そして、第 1 期末には、有価証券は 1 期間分の利息が生じることにより増加する。

$$[\text{有価証券 } i(-VCE_0 + P_1) + iVCE_0 / \text{利息 } i(-VCE_0 + P_1) + iVCE_0] \\ (\rightarrow [\text{有価証券 } iP_1 / \text{利息 } iP_1])$$

同様に、保険負債は、第 1 期末には時の経過に伴い利息が生じることにより増加する。

$$[\text{利息 } i(-VCE_0 + P_1) / \text{保険負債 } i(-VCE_0 + P_1)]$$

さらに、期待超過利益についても、第 1 期末には時の経過に伴い利息が生じることにより増加する。

$$[\text{利息 } iVCE_0 / \text{期待超過利益 } iVCE_0]$$

利子に関して、川崎 [2014] 55～60 頁にて検討した、従来の会計でなされている処理（将来法を前提）と経済上の処理の二者と、いま検討した、会計上保険負債を経済価値で測定する場合の処理を比較すると、以下の図表 3 のようになる。ただし、川崎 [2014] では、有価証券について、将来の見積りによる測定を、基本的には想定していなかったが、本稿では、有価証券についても、保険負債などと同様、将来の見積りによる測定を行っている。従って、有価証

券に対する利息の金額についても、将来の見積りによって測定されている有価証券の測定値に利子率を乗じて算定している。

図表 3 利息についての処理—三者比較—

従来の会計上の処理（将来法）	会計上保険負債を経済価値で測定する場合の処理	経済上の処理
$\frac{\text{有価証券 } i(-VCE_0+P_1)+iVCE_0}{\text{利息 } i(-VCE_0+P_1)+iVCE_0}$ $\frac{\text{利息 } i(-VCE_0+P_1)+iVCE_0}{\text{保険負債 } i(-VCE_0+P_1)+iVCE_0}$ <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">認識される利息の金額：0</p>	$\frac{\text{有価証券 } i(-VCE_0+P_1)+iVCE_0}{\text{利息 } i(-VCE_0+P_1)+iVCE_0}$ $\frac{\text{利息 } i(-VCE_0+P_1)}{\text{保険負債 } i(-VCE_0+P_1)}$ $\frac{\text{利息 } iVCE_0}{\text{期待超過利益 } iVCE_0}$ <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">認識される利息の金額：0</p>	$\frac{\text{有価証券 } i(-VCE_0+P_1)+iVCE_0}{\text{利息 } i(-VCE_0+P_1)+iVCE_0}$ $\frac{\text{利息 } i(-VCE_0+P_1)}{\text{保険負債 } i(-VCE_0+P_1)}$ <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">認識される利息の金額：iVCE<sub>0</sub></p>

経済上、第 1 期首に受領した保険料の有価証券への投下時に、 $P_1 = (-VCE_0 + P_1) + VCE_0$  で測定されている有価証券は、第 1 期の経過による利息の発生で、利息分  $iP_1 = i(-VCE_0 + P_1) + iVCE_0$  だけ増加する。また、第 1 期首の保険料受領時に  $-VCE_0 + P_1$  で測定されている保険負債についても、第 1 期の経過による利息の発生で、利息分  $i(-VCE_0 + P_1)$  だけ増加する。これらの利息はともに所得を構成するが、有価証券に対する利息と保険負債に対する利息とを相殺すると、利子に関して最終的に所得となるのは  $iVCE_0$  である。つまり、経済上は、保険契約締結時点の期待超過利益に対する利子のみが、その期の所得になる。

一方、従来の会計では、有価証券は、第 1 期首に受領した保険料の有価証券への投下時に  $P_1 = (-VCE_0 + P_1) + VCE_0$  で測定され、その後 1 期間の経過による利息の発生で、第 1 期末には、利息分  $iP_1 = i(-VCE_0 + P_1) + iVCE_0$  だけ増加する。また、保険負債は、第 1 期首の保険料受領時には、その受領額  $P_1 = (-VCE_0 + P_1) + VCE_0$  で測定され、第 1 期末には、1 期間の経過による利息の発生で、利息分  $iP_1 = i(-VCE_0 + P_1) + iVCE_0$  だけ増加する。有価証券に対する利息は一定期間の運用による利殖分であり、また、保険負債に対する利息は、受領した保険料を一定期間自由に使用したことに対する見返りとしての負担分を意味する。これらの利息を相殺すると、利益（純利益）項目として計上される利息は全体ではゼロとなる。

以上から明らかであるように、利子に関する、経済上と従来の会計上の処理における相違は、契約締結当初の期待超過利益の時間の経過に対する利子が、前者の場合には所得を構成する一方、後者の場合には利益（純利益）を構成しないところにある。

この点は、経済上と会計上の所得あるいは利益認識の時点の違いから生じるものであると捉えられる。期待超過利益に対する利子は、経済上は、その期の所得となるが、一方、会計上は、保険者の報酬としての確実性・確定性が高まった時点において、利子増加後の期待超過利益が、その期の利益となる。よって、会計上では、期待超過利益に対する利子は、そうした時点に到達するまで利益として認識されない<sup>31)</sup>。

従って、会計上、保険負債を経済価値で測定する場合にも、会計上の利益概念を保持するような処理を検討することが適切である。そうした処理として、前節で述べた、保険契約締結時点の期待超過利益をその他の包括利益（OCI）項目として計上することと同様に、期待超過利益に対する利子も、保険者の報酬としての確実性・確定性が高まる時点まで、その他の包括利益（OCI）に計上するというものが考えられる。

## ② 期待超過利益のその他の包括利益（OCI）から利益（純利益）への振替

保険契約期間の各期末において、その期の保険金額が確定すると、保険者がその期に保険契約を遂行したことに対する報酬が利益（純利益）として認識されることになる。既述のように、この報酬は、保険者がその期の保険契約を遂行するために不可欠な報酬である正常利益 RP とこれを超える報酬である超過利益 SP に分類される。会計上、保険負債を経済価値で測定している場合、前者については、保険負債から利益（純利益）に振り替えるが、一方、後者については、その他の包括利益（OCI）に計上されている期待超過利益から、当期に稼得したと捉えられる部分を、利益（純利益）に振り替えることが考えられる。

例えば、保険契約期間が複数の期間に亘る場合、第 1 期の保険者の保険契約遂行に対する報酬について、正常利益部分を  $RP_1$ 、超過利益部分を  $SP_1$  とすると、第 1 期の期末の会計処理は以下のようになる。

[保険負債  $RP_1$ ／報酬（純利益）  $RP_1$ ]

[期待超過利益 (OCI)  $SP_1$ ／報酬 (純利益)  $SP_1$ ]

川崎 [2014] 56～58 頁では、保険者の報酬に関する、経済上の処理と従来の会計上の処理について検討しているが、これらと、会計上保険負債を経済価値で測定する場合の処理とを比較すると、つぎの図表 4 のようになる。

図表 4 保険者の報酬の処理—三者比較—

従来の会計上の処理 (将来法)	会計上保険負債を経済価値で測定する場合の処理	経済上の処理
保険負債 $RP_1$ ／報酬 (純利益) $RP_1$	保険負債 $RP_1$ ／報酬 (純利益) $RP_1$	保険負債 $RP_1$ ／報酬 (所得) $RP_1$
保険負債 $SP_1$ ／報酬 (純利益) $SP_1$	期待超過利益 (OCI) $SP_1$ ／報酬 (純利益) $SP_1$	—

経済上、経済価値で測定されている保険負債から  $RP_1$  が剥落し、保険者のその期の報酬となる。この  $RP_1$  と前項でみた保険契約締結時における期待超過利益に対する利子の合計が、その期の保険者の所得となると考えられる。一方、従来の会計では、保険契約者 (集団) から受領した保険料に利子を加味した金額で測定されている保険負債から、第 1 期に係る  $RP_1$  と  $SP_1$  が、その期の保険者の報酬として利益 (純利益) に振り替えられる。

このように、経済上と従来の会計上の処理とでは、正常利益である  $RP_1$  が、第 1 期の保険者の所得あるいは利益となる点において共通である。一方、保険契約締結時点における期待超過利益については、経済上は資本として維持され、保険者の所得となるのはこれに対する利子のみであるが、従来の会計では、保険負債を構成する要素である利子増加後の期待超過利益のうち、第 1 期の保険契約遂行に対する報酬と捉えられる部分が、保険者の利益となる。つまり、従来の会計では、保険契約締結時点の期待超過利益も、これに対する利子とあわせて、保険契約期間の各期に亘り、期待が事実となったと判断される時点において、その期の保険者の利益として認識される。

こうした期待超過利益に関する経済上と従来の会計上の処理の相違は、経済上と会計上の資本と所得 (利益) 概念の相違を反映したものであると考えられる。つまり、保険契約締結時点の期待超過利益を資本として維持するのかそれとも保険者の報酬の確実性・確定性が高まった期に利益とするのかという、資

本と所得（利益）の区分の相違と、期待超過利益に対する利子を、それが生じた期に所得とするのかそれとも保険者の報酬の確実性・確定性が高まった期に利益とするのかという、所得（利益）の認識時点の相違である。従って、会計上、保険負債を経済価値で測定する場合においても、この相違の保持が可能な処理を行うことが適切である。そうした処理として、第 1 期末時点において、その他の包括利益(OCI)に計上されている利子増加後の期待超過利益のうち、第 1 期の保険契約遂行に対する報酬と判断される部分を、利益（純利益）に振り替えるというものが考えられる。

#### （４）期待超過利益について

これまで、経済上と会計上の資本と所得（利益）概念の相違を維持しながら、会計上、保険負債を経済価値で測定しようとするときの処理について検討を行ってきた。そこでは、期待超過利益の処理が大きな論点となったが、この期待超過利益に対する経済上と会計上の考え方の相違をまとめると図表 5 のようになる。

図表 5 期待超過利益に関する経済上と会計上の考え方の相違

	会計上	経済上
保険契約締結時点の期待超過利益	将来 <sup>*1</sup> の利益	資本と所得（利益）の区分の相違 資本
期待超過利益に対する利子	将来 <sup>*1</sup> の利益	所得（利益）認識時点 <sup>*2</sup> の相違 現在の所得

\*1 報酬としての確実性・確実性が満たされる時点

\*2 認識時点が相違する結果、金額も相違する

このように、期待超過利益の考え方については、経済上と会計上とで図表 5 のような相違があり、従って、会計上保険負債を経済価値で測定する場合には、保険負債を経済価値で測定しつつ、こうした相違を保持できるような処理を行うことが適切である。本稿では、そうした処理とはどのようなものなのかという点について検討を行ってきた。

期待超過利益について、従来の会計上における将来法の処理、会計上保険負債を経済価値で測定する場合の処理及び経済上の処理の相違を整理すると図表6のようになる。

図表 6 期待超過利益の処理—三者比較—

	従来の会計上の処理 (将来法)	会計上保険負債を経済価値で 測定する場合の処理	経済上の処理
捉え方	一つの要素	一つの要素	残余概念
保険契約締結時	保険負債の一部	その他の包括利益	資本
各期の利子	保険負債の一部	その他の包括利益	生じた期の所得
当初の期待超過利益の 利益（所得）認識	有 <sup>*1</sup> (保険負債→純利益)	有 <sup>*1</sup> (その他の包括利益→純利益)	無 <sup>*2</sup> (資本として維持)

\*1 保険契約締結時点以降の時の経過による利子分を含んだ期待超過利益の金額が、徐々に利益として認識される

\*2 当初の期待超過利益は資本として維持され、期待超過利益に対する利子のみが、それが生じた期の所得になる

従来の会計上の将来法による処理では、期待超過利益は、一つの要素として保険負債の一部を構成する。そして、時の経過により利子分だけ増加した保険負債は、保険契約期間に亘り利益（純利益）に振り替えられる。一方、経済上は、期待超過利益は、将来見込まれる保険料の現在価値から、将来見込まれる保険金や正常利益である RP の現在価値を控除して算定される残余である。そして、保険契約締結時の期待超過利益は、資本として維持され、これに対する利子のみが、保険負債を構成している RP とともに、毎期の所得になる。

ここで、会計上保険負債を経済価値で測定する場合には、経済上と同様に保険負債を経済価値で測定しつつ、資本・利益概念については会計上の考え方を保持するために、保険契約締結時点の期待超過利益とこれに対する時の経過による利子をその他の包括利益（OCI）に計上することが考えられる。その後、期待超過利益について、保険者の報酬としての確実性・確定性が満たされたときに、その他の包括利益（OCI）に計上されている、利子分だけ増加している期待超過利益を利益（純利益）に振り替えるという処理が考えられる。

このように、保険契約締結時点の期待超過利益は、その後の時の経過によりそれ自体が利子分だけ増加し、保険者の報酬と判断される時期に利益認識されることから、経済上のように他の要素（項目）の測定値に依存する残余概念で

はなく、従来の会計上と同様、一つの要素として捉えられる。ただし、従来の会計上では、期待超過利益は保険負債の測定値を構成する要素の一つとなるが、会計上保険負債を経済価値で測定する場合には、期待超過利益は、保険負債とは切り離されて、その他の包括利益 (OCI) の一項目となる点において異なる。

## (5) まとめ

本稿では、会計上保険負債を経済価値で測定する場合の処理について、経済上の処理や従来の会計上の処理と比較しながら検討を行った。川崎 [2014] 53 頁の図表 2 は、従来の会計上の処理と経済上の処理との相違をまとめたものであるが、この表から、従来の会計上の将来法による処理と経済上の処理について記載した欄を抽出し、これらの欄の間に、本稿での、会計上保険負債を経済価値で測定する場合の処理に関する検討内容を挟んで整理すると、図表 7 のようになる。

図表 7 の第 1 列と第 3 列にある欄は、川崎 [2014] で示した内容を基礎にこれを少し修正して作成したものであり、一方、第 2 列にある欄は、本稿で検討した内容をもとにまとめたものである。この図表の、実線で囲んだ部分は、経済上の処理と会計上保険負債を経済価値で測定する場合の処理との共通点を示し、一方、点線で囲んだ部分は、従来の会計上の処理と会計上保険負債を経済価値で測定する場合の処理との共通点を表す。また、この図表で記載されている具体的な処理において波線を付している部分は、三者の処理の相違を明確に示すところである。

図表 7 保険負債の測定—三者比較—\*1

	従来の会計上の測定 (将来法を想定)	会計において、 保険負債の経済価値測定を導入		経済上想定される測定
保険負債勘定の捉え方	元手	リスクのある投資		リスクのある投資
保険負債の測定属性	償却収入 (あるいは借換収入) に相当	主観価値 (投資の価値)	主観価値 (投資の価値)	主観価値 (投資の価値)
保険負債の算定式	[将来法] 受領しているべき保険料額 (及び利子増価額) : 将来の期に係る保険料額の現在価値から 将来受領予定の保険料額の現在価値を 控除した金額	[確実性等価 (CE) 法] 期待 CF の現在価値額 (VCE) : 将来受領予定の保険料額の現在価値から 将来の保険金支払予定額の現在価値と RP の現在価値を控除した金額	[確実性等価 (CE) 法] 期待 CF の現在価値額 (VCE) : 将来受領予定の保険料額の現在価値から 将来の保険金支払予定額の現在価値と RP の現在価値を控除した金額	[確実性等価 (CE) 法] 期待 CF の現在価値額 (VCE) : 将来受領予定の保険料額の現在価値から 将来の保険金支払予定額の現在価値と RP の現在価値を控除した金額
具体的な処理	超過利益 SP の捉え方	一つの要素	一つの要素	残余概念
	各期の利益 (所得) 認識額	その期に係る RP + その期に係る SP	その期に係る RP + その期に係る SP	その期に係る $RP + VCE_0 \times \text{利子率}$
	超過利益 SP の 利益 (所得) 認識	有 (負債 → 純利益)	有 (その他の包括利益 → 純利益)	無 ( $VCE_0$ は資本として維持)
	契約締結時	$\text{有価証券 } 0 / \text{保険負債 } 0 \leftarrow \left[ \begin{array}{l} \text{保険負債 } -VCE_0 \\ \text{保険負債 } VCE_0 \end{array} \right]$	$\text{有価証券 } 0 / \text{保険負債 } -VCE_0$ 期待超過利益 $VCE_0$	$\text{有価証券 } 0 / \text{保険負債 } -VCE_0$ 資本 $VCE_0$
	期末時 (例: 第 1 期末) 利子	$\text{有価証券 } i(-VCE_0+P_1)+iVCE_0 / \text{利息 } i(-VCE_0+P)+iVCE_0$ $\text{利息 } i(-VCE_0+P_1)+iVCE_0 / \text{保険負債 } i(-VCE_0+P)+iVCE_0$ —	$\text{有価証券 } i(-VCE_0+P_1)+iVCE_0 / \text{利息 } i(-VCE_0+P)+iVCE_0$ $\text{利息 } i(-VCE_0+P) / \text{保険負債 } i(-VCE_0+P)$ 利息 $iVCE_0 / \text{期待超過利益 } iVCE_0$	$\text{有価証券 } i(-VCE_0+P)+iVCE_0 / \text{利息 } i(-VCE_0+P)+iVCE_0$ $\text{利息 } i(-VCE_0+P) / \text{保険負債 } i(-VCE_0+P)$ —
報酬	$\text{保険負債 } RP_1 / \text{報酬 } RP_1$ $\text{保険負債 } SP_1 / \text{報酬 } SP_1$	$\text{保険負債 } RP_1 / \text{報酬 } RP_1$ 期待超過利益 $SP_1 / \text{報酬 } SP_1$	$\text{保険負債 } RP_1 / \text{報酬 } RP_1$ —	
利益 (所得) の金額	$RP_1 + SP_1$	$RP_1 + SP_1$	$RP_1 + iVCE_0$	

\*1 RP...正當利益、SP...超過利益  
VCE<sub>0</sub>...契約締結時点における保険契約の経済価値 (=当該時点において予想される超過利益の現在価値)



保険契約締結時点における期待超過利益は、経済上は資本に計上されるが、会計上では、維持される資本としてではなく、保険契約期間中の各期に見込まれる利益として捉えられる。それは、保険契約期間中の各期に、保険者の報酬としての確実性・確定性が高まった時点で利益となる。また、保険契約締結以降、時の経過に伴って生じる期待超過利益に対する利子は、経済上その期の所得となるが、会計上は、その期の保険者の報酬として認められる部分のみ、当期の利益となる。

このように、経済上と会計上では、資本・所得（利益）の区別の相違や所得（利益）の認識時点の相違といった、資本・所得（利益）概念の相違がある。本稿では、経済上と会計上の資本・所得（利益）概念の相違を保持しながら、会計上、保険負債を経済上と同様の経済価値で測定するため、期待超過利益をその他の包括利益（OCI）項目の一つとして計上することを検討した。そうした処理として、保険契約締結時点の期待超過利益とこれに対する利子をその他の包括利益（OCI）に計上し、その後、保険契約期間中に亘り、利子分だけ増加している期待超過利益を、保険者の報酬としての確実性・確定性が高まったときにその他の包括利益（OCI）から利益（純利益）に振り替えるというものが考えられた。

### 3. モデルケースによる検討

#### （１）会計上保険負債を経済価値で測定する場合の処理

##### ① 前提

ここでは、川崎[2014]と同様に、モデルケースを通じて、上記の議論の内容を整理する。

いま、ある保険契約について、保険契約期間が２期間であり、保険者は各期首に一定額（＝平準払）の保険料を保険契約者から受領する一方、保険金を各期末に支払うと仮定する。

各期首に入金される１契約あたりの一定額の保険料を  $p$  とする。契約利子率を  $i$  とすると、 $p$  は、以下の式を解いて算出される。

$p \times 1$  期首契約件数 +  $p \times 2$  期首残存契約件数 /  $(1+i)$

$= 1$  期の保険金額及び報酬 /  $(1+i)$  +  $2$  期の保険金額及び報酬 /  $(1+i)^2 \cdots 3.1.1$

3.1.1 式の左辺の第 1 項（1 期首入金の保険料）を  $P_1$ 、第 2 項の分子（2 期首入金の保険料）を  $P_2$ 、右辺の第 1 項の保険金額を  $S_1$ 、第 2 項のそれを  $S_2$  とする。また、各期の保険者の報酬を正常利益と超過利益に分解して、それぞれを  $RP$  と  $SP$  と置くと、3.1.1 式は、3.1.2 式となる。

$$P_1 + P_2 / (1+i) = S_1 / (1+i) + RP_1 / (1+i) + SP_1 / (1+i) + S_2 / (1+i)^2 + RP_2 / (1+i)^2 + SP_2 / (1+i)^2 \cdots 3.1.2$$

当該保険契約をタイムテーブルで示すと、以下ようになる。

0 時点	≡ 1 期首	1 期末	≡ 2 期首	2 期末
契約締結	契約開始			契約終了
	保険料入金	保険金支払	保険料入金	保険金支払

## ② 保険契約締結時の処理

2.（2）より、保険契約締結時点の会計処理は、以下ようになる。

$$\left( \begin{array}{c|c} \text{有価証券} & 0 \\ \hline \text{保険負債} & -VCE_0 \\ \text{期待超過利益 (OCI)} & VCE_0 \end{array} \right)$$

まず、貸方の保険負債と期待超過利益から検討を行う。 $-VCE_0$  は、貨幣の時間価値を示す利子率を  $i$  とすると、つぎの式により算定される<sup>32)</sup>。

$$-VCE_0 = -\{P_1 - S_1 / (1+i) - RP_1 / (1+i)\} - \{P_2 / (1+i) - S_2 / (1+i)^2 - RP_2 / (1+i)^2\} \cdots 3.1.3$$

これが、保険契約締結時点の保険負債の測定値である。 $VCE_0$  は、当該時点の保険契約の経済価値を意味する。そして、1 期間経過後の第 1 期末には、保険負債は  $-VCE_1$  で測定される。これは、以下の式により算定される。 $VCE_1$  は、第 1 期末時点における保険契約の経済価値を表す。

$$-VCE_1 = -\{P_2 - S_2 / (1+i) - RP_2 / (1+i)\} \cdots 3.1.4$$

つぎに、3.1.2 式を変形すると、3.1.5 式になる。

$$\begin{aligned} & \{P_1 - S_1 / (1+i) - RP_1 / (1+i)\} + \{P_2 / (1+i) - S_2 / (1+i)^2 - RP_2 / (1+i)^2\} \\ & = SP_1 / (1+i) + SP_2 / (1+i)^2 \cdots 3.1.5 \end{aligned}$$

3.1.5 式の左辺は、3.1.3 式より  $VCE_0$  であるから、これを用いて表すと、以下のようになる。

$$VCE_0 = SP_1 / (1+i) + SP_2 / (1+i)^2 \cdots 3.1.6$$

3.1.6 式より、保険契約締結時点の保険契約の経済価値  $VCE_0$  は、その保険契約の遂行により保険契約期間の各期に稼得すると見込まれる超過利益の現在価値の合計額と同額になることが分かる。

ここで、経済価値で測定された保険負債の相手勘定として、期待超過利益というその他の包括利益（OCI）の項目を用いる。これは、維持される資本や現在の利益ではない、将来見込まれる利益を表しており、保険契約の各期に見込まれる超過利益の現在価値の合計額で測定され、保険契約締結時点においては、当該時点の保険契約の経済価値  $VCE_0$  と一致する。上記の仕訳では、保険契約締結時点において、保険負債と期待超過利益とで金額が同額であることを強調するため、期待超過利益の測定値についても  $VCE_0$  と表記している。

つぎに、借方の有価証券について検討を行う。保険契約締結時点において、有価証券は、2.2.1 式を参考にし、保険契約期間において受領した保険料の有価証券への投下によるキャッシュアウトフローや、保険金や認識した利益の配当支払のための有価証券償還によるキャッシュインフローを予測し、運用利回りを意味する利子率を  $i$  とすると、以下のように算定される。

$$\begin{aligned} \text{有価証券} = & -P_1 + S_1 / (1+i) + RP_1 / (1+i) + SP_1 / (1+i) - P_2 / (1+i) + S_2 / (1+i)^2 \\ & + RP_2 / (1+i)^2 + SP_2 / (1+i)^2 \cdots 3.1.7 \end{aligned}$$

この 3.1.7 式を変形すると、3.1.8 式になる。

$$\begin{aligned} \text{有価証券} = & -\{P_1 - S_1 / (1+i) - RP_1 / (1+i)\} - \{P_2 / (1+i) - S_2 / (1+i)^2 - RP_2 / (1+i)^2\} \\ & + \{SP_1 / (1+i) + SP_2 / (1+i)^2\} \cdots 3.1.8 \end{aligned}$$

そして、3.1.8 式は、3.1.3 式及び 3.1.6 式より、3.1.9 式になる。

$$\text{有価証券} = -VCE_0 + VCE_0 = 0 \cdots 3.1.9$$

上記の式より、保険契約締結時点における有価証券の測定値は 0 であることが分かる。

### ③ 第 1 期の処理

保険契約が開始され、1 期首に  $P_1$  だけ保険料を受領し、受領した現金を有価証券に投下すると、つぎの会計処理がなされる。

[現金  $P_1$  / 保険負債  $P_1$ ] [有価証券  $P_1$  / 現金  $P_1$ ]

この会計処理により、保険契約締結時点の保険負債と有価証券の測定値から、保険料受領額  $P_1$  が、期待が事実へと変化したことにより取り除かれ、保険負債の測定値は  $-VCE_0 + P_1$ 、有価証券の測定値は  $P_1 (= (-VCE_0 + P_1) + VCE_0)$  となる。

この有価証券を 1 年間運用すると、第 1 期末には、利子分だけ有価証券が増加する。

[有価証券  $i(-VCE_0 + P_1) + iVCE_0$  / 利息 (純利益)  $i(-VCE_0 + P_1) + iVCE_0$ ]

また、同時期に、保険負債が、時の経過により利子分だけ増加する。

[利息 (純利益)  $i(-VCE_0 + P_1)$  / 保険負債  $i(-VCE_0 + P_1)$ ]

そして、その他の包括利益 (OCI) に計上されている期待超過利益についても、時の経過により利子分だけ増加する。

[利息 (純利益)  $iVCE_0$  / 期待超過利益 (OCI)  $iVCE_0$ ]

さらに、保険契約を 1 期間引き受けたことによる保険者の報酬が当期の利益 (純利益) として認識される。正常利益部分は保険負債から、超過利益部分は期待超過利益から、当期の利益 (純利益) に振り替えられる。

[保険負債  $RP_1$  / 報酬 (純利益)  $RP_1$ ]

[期待超過利益 (OCI)  $SP_1$  / 報酬 (純利益)  $SP_1$ ]

また、第 1 期末には、第 1 期に係る保険金額  $S_1$  や保険者の報酬額 (利益額)  $RP_1 \cdot SP_1$  だけ有価証券が償還され、以下の会計処理がなされる。

[現金  $S_1 + RP_1 + SP_1$  / 有価証券  $S_1 + RP_1 + SP_1$ ]

当該資金によって保険金の支払が行われ、これとともに、保険負債が減少する。

[保険負債  $S_1$  / 現金  $S_1$ ]

同様に、当期認識された利益 (純利益) に基づき、配当がなされる。

[配当金 (利益剰余金)  $RP_1 + SP_1$  / 現金  $RP_1 + SP_1$ ]

上記の一連の会計処理から、保険負債に関するものを取り出すと、つぎのよ

うになる。

$$\begin{aligned}\text{保険負債} &= -\text{VCE}_0 + \text{P}_1 + i(-\text{VCE}_0 + \text{P}_1) - \text{S}_1 - \text{RP}_1 \\ &= -(1+i)\text{VCE}_0 + \{(1+i)\text{P}_1 - \text{S}_1 - \text{RP}_1\} \quad \cdots 3.1.10\end{aligned}$$

ここで、3.1.3 式及び 3.1.4 式より、3.1.11 式が出来上がる。

$$\text{VCE}_0 = \{\text{P}_1 - \text{S}_1 / (1+i) - \text{RP}_1 / (1+i)\} + \text{VCE}_1 / (1+i) \quad \cdots 3.1.11$$

この式の両辺に  $(1+i)$  を乗じると、3.1.12 式となる。

$$(1+i)\text{VCE}_0 = (1+i)\text{P}_1 - \text{S}_1 - \text{RP}_1 + \text{VCE}_1 \quad \cdots 3.1.12$$

この式の右辺の  $\text{VCE}_1$  を左辺に移項すると、3.1.13 式が導かれる。

$$(1+i)\text{VCE}_0 - \text{VCE}_1 = (1+i)\text{P}_1 - \text{S}_1 - \text{RP}_1 \quad \cdots 3.1.13$$

3.1.10 式の第 2 項は、3.1.13 式より  $(1+i)\text{VCE}_0 - \text{VCE}_1$  と整理され、よって、3.1.10 式は以下になる。

$$\text{保険負債} = -(1+i)\text{VCE}_0 + (1+i)\text{VCE}_0 - \text{VCE}_1 = -\text{VCE}_1 \quad \cdots 3.1.14$$

これは、3.1.4 式において示しているとおり、保険負債の第 1 期末における測定値である。

つぎに、有価証券に関するものを取り出すと、以下のように示されるが、これは、保険金及び配当金支払後の有価証券の第 1 期末の測定値である。

$$\begin{aligned}\text{有価証券} &= -\text{VCE}_0 + \text{VCE}_0 + \text{P}_1 + i(-\text{VCE}_0 + \text{P}_1) + i\text{VCE}_0 - \text{S}_1 - \text{RP}_1 - \text{SP}_1 \\ &= \{(1+i)(-\text{VCE}_0 + \text{P}_1) - \text{S}_1 - \text{RP}_1\} + (1+i)\text{VCE}_0 - \text{SP}_1 \quad \cdots 3.1.15\end{aligned}$$

ここで、3.1.3 式に  $(1+i)$  を乗じて、右辺の第 1 項を左辺に移項して整理し、さらに、3.1.4 式の結果を用いると、3.1.16 式が導き出される。

$$(1+i)(-\text{VCE}_0 + \text{P}_1) - \text{S}_1 - \text{RP}_1 = -\{\text{P}_2 - \text{S}_2 / (1+i) - \text{RP}_2 / (1+i)\} = -\text{VCE}_1 \quad \cdots 3.1.16$$

3.1.16 式より、3.1.15 式は以下になる。

$$\text{有価証券} = -\text{VCE}_1 + (1+i)\text{VCE}_0 - \text{SP}_1 \quad \cdots 3.1.17$$

ここで、3.1.6 式に  $(1+i)$  を乗じて、当該式右辺の第 1 項を左辺に移項すると、次式が出来上がる。

$$(1+i)\text{VCE}_0 - \text{SP}_1 = \text{SP}_2 / (1+i) \quad \cdots 3.1.18$$

3.1.18 式を用いて、3.1.17 式を整理すると、以下のように表される。

$$\text{有価証券} = -\text{VCE}_1 + \text{SP}_2 / (1+i) \quad \cdots 3.1.19$$

また、上記の一連の会計処理から、その他の包括利益 (OCI) に計上されて

いる期待超過利益について抜き出すと、つぎのようになる。

$$\begin{aligned}\text{期待超過利益} &= \text{VCE}_0 + i\text{VCE}_0 - \text{SP}_1 \\ &= (1+i)\text{VCE}_0 - \text{SP}_1 \quad \cdots 3.1.20\end{aligned}$$

3.1.20 式は、3.1.18 式を用いると以下のようになる。

$$\text{期待超過利益} = \text{SP}_2 / (1+i) \quad \cdots 3.1.21$$

これが、第 1 期末の期待超過利益の測定値である。

第 2 期においても、上記に示した第 1 期と同様の方法で会計処理が行われる。

## (2) 経済上の有価証券の測定値

上記では、会計上、保険負債を経済価値で測定する場合の、保険負債、期待超過利益及び有価証券の処理を検討してきたが、従来の会計上行われてきた将来法による処理においても、有価証券に関する将来のキャッシュフローの流列は、(1) で考察した、会計上保険負債を経済価値で測定するときと同様になるため、有価証券の測定値は両者で同じになる。一方、経済上の有価証券の測定値は、どのように算定されるのだろうか。

2.2.3 式を参考にすると、保険契約締結時の有価証券は、次式により測定される。

$$\begin{aligned}\text{有価証券} &= -\text{P}_1 + \text{S}_1 / (1+i) + \text{RP}_1 / (1+i) + i\text{VCE}_0 / (1+i) - \text{P}_2 / (1+i) + \text{S}_2 / (1+i)^2 \\ &\quad + \text{RP}_2 / (1+i)^2 + i\text{VCE}_0 / (1+i)^2 + \text{VCE}_0 / (1+i)^2 \quad \cdots 3.2.1\end{aligned}$$

3.2.1 式を変形すると、3.2.2 式になる。

$$\begin{aligned}\text{有価証券} &= -\{\text{P}_1 - \text{S}_1 / (1+i) - \text{RP}_1 / (1+i)\} - \{\text{P}_2 / (1+i) - \text{S}_2 / (1+i)^2 - \text{RP}_2 / (1+i)^2\} \\ &\quad + i\text{VCE}_0 / (1+i) + i\text{VCE}_0 / (1+i)^2 + \text{VCE}_0 / (1+i)^2 \quad \cdots 3.2.2\end{aligned}$$

3.2.2 式は、3.1.3 式より、また、第 3～5 項はまとめると  $\text{VCE}_0$  であるから、3.2.3 式となる。

$$\text{有価証券} = -\text{VCE}_0 + \text{VCE}_0 = 0 \quad \cdots 3.2.3$$

これが、保険契約締結時の有価証券の測定値である。このように、当該時点の有価証券の測定値は、経済上においても (1) で検討した会計上と同様 0 となるが、3.1.7 式と 3.2.1 式を比較すると分かるように、この 0 を構成する将来キャッシュフローの流列は、両者では異なる。つまり、毎期末に認識される所

得と利益が異なるので、毎期末の予想配当額が異なる。また、経済上は会計上と異なり、保険契約終了時まで  $VCE_0$  が資本として維持されて配当されない。本稿では、経済上、 $VCE_0$  に対応する有価証券が、満期償還により現金として保険者に流入すると仮定している。

第 1 期中には、期待が事実へと変化することによって、有価証券の測定値が変動し、第 1 期末においては、有価証券は次式によって測定される。

$$\begin{aligned} \text{有価証券} &= -VCE_0 + VCE_0 + P_1 + i(-VCE_0 + P_1) + iVCE_0 - S_1 - RP_1 - iVCE_0 \\ &= \{(1+i)(-VCE_0 + P_1) - S_1 - RP_1\} + VCE_0 \cdots 3.2.4 \end{aligned}$$

この式の第 1 項は、3.1.16 式より  $-VCE_1$  と等しく、従って、3.2.4 式は、3.2.5 式となる。

$$\text{有価証券} = VCE_0 - VCE_1 \cdots 3.2.5$$

第 2 期においても、第 1 期と同様の方法で有価証券の測定が行われる。

### (3) 比較

川崎 [2014] 60 頁における検討と本稿での検討を総合すると、図表 8 となる。図表 8 では、従来の会計上における将来法での処理、会計上保険負債を経済価値で測定する場合の処理、経済上の処理のそれぞれにおいて作成される貸借対照表と損益計算書（あるいは所得計算書や包括利益計算書）について比較している。

図表 8 会計上あるいは経済上作成される貸借対照表と損益・所得・包括利益計算書

	従来の会計上の測定 (将来法を想定)		会計において、 保険負債の経済価値測定を導入		経済上想定される測定	
契約締結時 B/S <sup>*1</sup>	有価証券 0	保険負債 0	有価証券 0	保険負債 -VCE <sub>0</sub> 期待超過利益 (OCI) VCE <sub>0</sub>	有価証券 0	保険負債 -VCE <sub>0</sub> 資本 VCE <sub>0</sub>
	有価証券 -VCE <sub>1</sub> SP <sub>2</sub> /(1+i)	保険負債 -VCE <sub>1</sub> SP <sub>2</sub> /(1+i)	有価証券 -VCE <sub>1</sub> SP <sub>2</sub> /(1+i)	保険負債 -VCE <sub>1</sub> 期待超過利益 (OCI) SP <sub>2</sub> /(1+i)	有価証券 VCE <sub>0</sub> -VCE <sub>1</sub>	保険負債 -VCE <sub>1</sub> 資本 VCE <sub>0</sub>
	損益計算書 (所得計算書) (包括利益計算書)	$i(-VCE_0+P_1)+iVCE_0$ $-[i(-VCE_0+P_1)+iVCE_0]$	包括利益計算書 純利益 その他の包括利益 包括利益	$i(-VCE_0+P_1)+iVCE_0$ $-i(-VCE_0+P_1)$ $-iVCE_0$ RP <sub>1</sub> +SP <sub>1</sub> RP <sub>1</sub> +SP <sub>1</sub> (1+i)VCE <sub>0</sub> -SP <sub>1</sub> RP+(1+i)VCE <sub>0</sub>	所得計算書 所得 資本 (以下参考) 資本+所得	$i(-VCE_0+P_1)+iVCE_0$ $-i(-VCE_0+P_1)$ RP <sub>1</sub> RP <sub>1</sub> +iVCE <sub>0</sub> VCE <sub>0</sub> RP <sub>1</sub> +(1+i)VCE <sub>0</sub>
	有価証券 -	保険負債 -	有価証券 -	保険負債 - 期待超過利益 (OCI) -	現金 VCE <sub>0</sub> 有価証券 -	保険負債 - 資本 VCE <sub>0</sub>
	損益計算書 (所得計算書) (包括利益計算書)	$i(-VCE_0+P_2)+iSP_2/(1+i)$ $-[i(-VCE_0+P_2)+iSP_2/(1+i)]$	包括利益計算書 純利益 その他の包括利益 包括利益	$i(-VCE_0+P_2)+iSP_2/(1+i)$ $-i(-VCE_0+P_2)$ $-iSP_2/(1+i)$ RP <sub>2</sub> +SP <sub>2</sub> RP <sub>2</sub> +SP <sub>2</sub> -SP <sub>2</sub> /(1+i) RP <sub>2</sub> +iSP <sub>2</sub> /(1+i)	所得計算書 所得 資本 (以下参考) 資本+所得	$i(VCE_0-VCE_1+P_2)$ $-i(-VCE_1+P_2)$ RP <sub>2</sub> RP <sub>2</sub> +iVCE <sub>0</sub> - RP <sub>2</sub> +iVCE <sub>0</sub>

<sup>\*1</sup> 有価証券は、 $0-VCE_0+VCE_0$  と測定される。



## 4. おわりに

本稿では、川崎 [2014] の続編として、会計上、保険負債を経済価値で測定する場合になされる処理について検討を行った。そこでは、期待超過利益の処理が主要な論点であった。期待超過利益の処理として、保険契約締結時点の期待超過利益とこれに対する時の経過による利子をその他の包括利益（OCI）に計上し、その後、利子分だけ増加している期待超過利益を、保険者の報酬としての確実性・確定性が満たされたときにその他包括利益（OCI）から利益（純利益）に振り替えるという処理が考えられた。期待超過利益というその他の包括利益（OCI）項目は、経済上と会計上の資本・所得（利益）概念の相違を保持しながら、保険負債を経済上と同様の経済価値で測定するために計上されていると捉えられた。

なお、川崎 [2014] とその続編である本稿では、期待（予想）と事実（実績）が一致することを仮定しており、両者が一致しない場合、つまりウィンドフォール（Windfall）が生じる場合を考慮していない。従って、このようなウィンドフォールがある場合の処理について、別稿にて検討したい。

---

## 注

- 1) 川崎 [2014] では、「測定」ではなく「評価」という言葉を用いているが、本稿では、一貫して「測定」という言葉を用いる。
- 2) ASBJ [2015] においても、保険負債を経済価値を表す履行キャッシュフロー（fulfilment cash flows）で測定し、未稼得の利益を表す契約サービスマージン（contractual service margin）をその他の包括利益（OCI）に計上することが提案されている（paras.23-24, 35-37を参照）。しかしながら、そこでは、表示の区分についての提案に止まり、より具体的な会計処理については検討されていない（*Ibid.*, para.22を参照）。
- 3) 例えば、IASB [2013a] para.18 と IASB [2017] para.32 を比較してみると、IFRS17で規定される保険負債の測定の基本的な構造は、EDから変更がないと解釈される。
- 4) IASB [2017]では、IASB [2013a]と同様、保険負債は、履行キャッシュフローと契約サービスマージンを合計した数値で測定される（IASB [2017] para.32 及び IASB [2013a] para.18を参照）。これらの要素のうちの履行キャッシュフローは、

保険契約の経済価値を表していると捉えられるが、保険負債は、これと契約サービスマージンを合計した数値で測定されているため、その測定値は、保険契約の経済価値を示すものではなくなる。

- 5) 川崎 [2014] 52 頁注 37 を参照。
- 6) 会計において保険負債を経済的な観点から測定することが議論されてきた背景としては、経済価値の有用性や規制の動向が挙げられる。保険契約の経済価値を示すエンベディッド・バリュー (Embedded Value: EV) が従来から (生命) 保険会社によって開示されているが、EV の実証研究において、EV は価値関連性があることが報告されており (Horton [2007] pp.193,195 を参照)、また、EV の開示によりビッドアスクスプレッドの情報の非対称性に関する要素が低減されることが報告されている (Serafeim [2011] p.531 を参照)。なお、EV については、この他にも、EV の開示を行う会社の特質について研究している文献もある (中村・西山 [2014] 107 頁を参照)。  
また、保険会社をめぐる資本規制の局面において、保険会社の資産・負債を経済価値で測定するということが議論されており、この動向も保険会計の議論に影響を及ぼしたと考えられる。最近の保険会社に対する国際的な資本規制の動向を整理したものとして、坂本 [2015] が挙げられる。会計及び規制における保険負債の測定や、これらと EV の関係について整理しているものとして、羽根 [2012] や上野 [2015] が挙げられる。
- 7) 詳細は、川崎 [2014] 47 頁を参照。
- 8) VCE という表記は、Bøhren [1983] を参考に行っている。また、確実性等価の概念については、野口・藤井 [2000] 18-32 頁を参照。
- 9) 詳細は、川崎 [2014] 48 頁を参照。
- 10) 保険契約締結時点では、保険資産を計上することが考えられるが、本稿では、一貫して、保険負債の勘定を用いる。従って、当該時点では、マイナスの保険負債が計上される。
- 11) 経済学における主観価値としての資本の概念は、Lindahl [1939] pp.96-99 (原訳 [1962] 88-91 頁) を参照。
- 12) Edwards and Bell [1961] p.42、斎藤 [2003] 202 頁、川崎 [2014] 48 頁を参照。
- 13) IASB などの会計基準設定機関において、保険負債の経済価値測定が採用されない理由の一つとして、現行の会計基準では、いわゆる主観のれん (自己創設のれん) の計上を認めていない (例えば、IASB [2013b] para.4.9(c) を参照) ということが推察される。保険負債を経済価値で測定すると、保険契約締結時点において、マイナスの保険負債が計上されるが、これは当該保険契約が有していると見込まれる超過利益の現在価値と同額であり、のれんを意味している。こののれんは、保険契約締結段階では、契約の履行は将来であるので、客観的なものというよりは主観的なものとして捉えられているのではないかと考えられる。しかしながら、保険契約の締結自体はなされているので、そこで生じるのれんは、完全に主観的とも言えない。従って、現行の会計基準の枠内で、保険負債を経済価値で測定することが不可能であるとは言い切れない。  
また、この他の理由として、川崎 [2016] 84 頁注 114 での記述と同様の内容が考えられる。
- 14) Horton *et al.* [2011]、Macve and Serafeim [2006] に学んでいる。
- 15) 川崎 [2014] 51 頁を参照。また、この点は、斎藤 [2013] 33 頁が参考になる。

- 16) 川崎 [2014] 41 頁を参照。
- 17) 詳細は、川崎 [2013] 76-77 頁、川崎 [2014] 41 頁を参照。
- 18) 同上 50 頁を参照。
- 19) ある勘定を 0 で測定する場合、認識しないことと同じであるという考え方もある（例えば、IASB [2013b] para.2.36 を参照）が、本稿では、そもそも認識しないことと、認識して 0 で測定することは区別して考える。
- 20) Rees and Shane [2012] pp.795-802 では、純利益とその他の包括利益（OCI）を区分する基準として、持続性の程度、主たる営業活動、経営者の統制、再測定を挙げ、さらに、未実現損益に言及している。また、IASB [2013b] pp.158-159 では、純利益とその他の包括利益（OCI）を区分する基準として、未実現、非反復、主たる営業活動以外、測定の不確実性、長期、経営者の統制外を挙げている。本稿で議論している期待超過利益は、これらの文献の議論に当てはめるのであれば、上記のうちの未実現の利益の項目に該当すると考えられる。  
日本基準、米国基準及び国際会計基準でその他の包括利益（OCI）に計上される項目について整理している文献として、河合 [2010] 24-39 頁が挙げられる。また、包括利益の概念やこれをめぐる各国の基準の動向を検討している文献として、佐藤編 [2003] が挙げられる。
- 21) このように、期待超過利益は、それが稼得されたと認められる時点において、その他の包括利益（OCI）から利益（純利益）に振り替えられるが、これは、従来、その他有価証券に対してなされてきた処理と同様のものであると捉えられる。その他有価証券に関するその他有価証券評価差額金は、我が国の基準では、その他の包括利益（OCI）に計上された後、純利益に振り替えられる（リサイクリング）（企業会計基準委員会 [2010] 7、9 項を参照）。同様に、米国基準では、その他有価証券は売却可能有価証券と呼ばれるが、売却可能有価証券に関する未実現利得は、その他の包括利益（OCI）に計上し、実現したときに純利益に含めるとされている（FASB [1997] para.18 を参照。FASB [1997] は、現在の Accounting Standards Codification (ASC) の Topic 220 に該当する。なお、FASB [2016] では、上記の処理の適用を売買可能負債性有価証券に限定するように改訂されている（paras.220-10-45-10A, 220-10-55-7 を参照）。国際会計基準においては、IASB [2005] では、その他有価証券は売却可能金融資産と呼ばれ、これを再測定したときに生じる利得は、その他の包括利益（OCI）に計上された後、純利益に振り替えられる処理がなされていた（para.20）が、IASB [2014] では、こうした処理を行うのは、簡潔に言えば、売却可能な負債性の金融商品に限定されている（paras. 4.1.2A, 5.7.1(d), 5.7.10 を参照）。
- 22) 「保存」という言葉は、慶應義塾大学商学部の友岡賛教授との議論から示唆を得たものである。
- 23) その他の包括利益（OCI）の計上方法として、資本直入と、包括利益計算書に計上する方法の二つがあるが、本稿では、後者の方法を前提とする。  
なお、保険会社（特に損害保険会社）がこれらの二つの方法のどちらを採用するのかという会計方針の選択と、利益マネジメントや開示の質などの関係について実証的に研究した文献として、Lee *et al.* [2006] が挙げられる。
- 24) 川崎 [2014] では、有価証券の処理については、ほとんど検討していなかったが、本稿では、保険負債などの貸方の項目のみならず、借方の項目である有価証券の

処理についても、併せて検討を行っていく。

- 25) Lindahl [1939] p.98 (原訳 [1962] 89 頁) が参考になる。
- 26) 川崎 [2014] 48 頁、Macve and Serafeim [2006] p.20 を参照。
- 27) ここでは、保険契約の締結と開始は同時であることを想定している。
- 28) 本稿では、予測と実績が一致することを想定する。
- 29) 以下の議論において同様とする。
- 30) このように、発生した利息を当期の負担とし費用計上すると、その分だけ資産が留保される。こうした留保分は、将来、保険者が報酬を稼得したと認められ、期待超過利益（その他の包括利益 (OCI)）から利益（純利益）に振り替えられた金額が配当されるときに原資となる。
- 31) この場合、認識の時期が異なると、金額も異なってくる。つまり、経済上は、毎期末、保険契約締結時点の期待超過利益の額という一定の金額に利子率を乗じる。一方、会計上は、毎期末において期待超過利益から利益に振り替えていくため、保険契約締結時点から徐々に減少している期待超過利益に対して利子率を乗じる。また、期待超過利益から利益に振り替えられるまで、期待超過利益は複利で増加していく。従って、経済上と会計上では、所得あるいは利益の認識時期が異なる結果、計上する金額も異なる。
- 32) 川崎 [2014] 57 頁を参照。

## 文献

- ASBJ: Accounting Standards Board of Japan [2015], *Insurance Contracts: Use of OCI for Presentation of Unearned Profits*. (企業会計基準委員会「保険契約 未稼得利益の表示に関する OCI の使用」、2015 年。)
- Böhren, Ø. [1983], Bounding certainty equivalent factors and risk adjusted discount rates, *Journal of Business Finance & Accounting*, 10(1).
- Edwards, E. O. and P. W. Bell [1961], *The Theory and Measurement of Business Income*, University of California Press. (中西寅雄監修、伏見多美雄・藤森三男訳『意思決定と利潤計算』日本生産性本部、1964 年。)
- FASB: Financial Accounting Standards Board [1997], Statement of Financial Accounting Standards No.130, *Reporting Comprehensive Income*.
- [2016], Accounting Standards Update, *Financial Instrument – Overall (Subtopic 825-10), Recognition and Measurement of Financial Assets and Financial Liabilities*.
- 羽根佳祐 [2012]「保険契約会計における経済的ミスマッチ報告の意義」『商学研究科紀要』第 75 号。
- Horton, J. [2007], The value relevance of ‘realistic reporting’: Evidence from UK life insurers, *Accounting and Business Research*, 37(3).
- Horton, J., R. Macve and G. Serafeim [2011], ‘Deprivation value’ vs. ‘fair value’ measurement for contract liabilities: How to resolve the ‘revenue recognition’ conundrum?, *Accounting and Business Research*, 41(5).
- IASB: International Accounting Standards Board [2005], International Financial Reporting Standard 7, *Financial Instruments: Disclosures*.
- [2013a], Exposure Draft, *Insurance Contracts*.

- [2013b], Discussion Paper, *A Review of the Conceptual Framework for Financial Reporting*.
- [2014], International Financial Reporting Standard 9, *Financial Instruments*.
- [2017], International Financial Reporting Standard 17, *Insurance Contracts*.
- 河合由佳理 [2010]『包括利益と国際会計基準』同文館出版。
- 川崎英有 [2013]「保険会計における負債の評価」『三田商学研究』第 56 巻第 5 号。
- [2014]「保険負債の評価—会計上と経済上の評価の相違—」『慶應商学論集』第 26 巻第 1 号。
- [2016]「保険会計をめぐる議論の変遷—「資産負債アプローチからハイブリッドアプローチへ」に代わる考え方による検討—」『三田商学研究』第 58 巻第 6 号。
- 企業会計基準委員会 [2010]「企業会計基準第 25 号 包括利益の表示に関する会計基準」。
- Lee, Y.-J., K. R. Petroni and M. Shen [2006], Cherry picking, disclosure quality, and comprehensive income reporting choices: The case of property-liability insurers, *Contemporary Accounting Research*, 23(3).
- Lindahl, E. [1939], *Studies in the Theory of Money and Capital*, George Allen & Unwin Ltd. (原正彦訳『貨幣および資本理論の研究』文雅堂書店、1962 年。)
- Macve, R. and G. Serafeim [2006], 'Deprivation value' vs 'fair value' measurement for contract liabilities in resolving the 'revenue recognition' conundrum: Towards a general solution, *LSE Working Paper*.
- 中村亮介・西山一弘 [2014]「生命保険会社における Embedded Value 開示の実態と役割」『東海大学紀要政治経済学部』第 46 号。
- 野口悠紀雄・藤井眞理子 [2000]『金融工学—ポートフォリオ選択と派生資産の経済分析—』ダイヤモンド社。
- Rees, L. L. and P. B. Shane [2012], Academic research and standard-setting: The case of other comprehensive income, *Accounting Horizons*, 26(4).
- 斎藤静樹 [2003]『企業会計とディスクロージャー [第 2 版]』東京大学出版会。
- [2013]『会計基準の研究 (増補改訂版)』中央経済社。
- 坂本博昭 [2015]「IAIS 国際保険資本基準について」『生命保険経営』第 83 巻第 4 号。
- 佐藤信彦編 [2003]『業績報告と包括利益』白桃書房。
- Serafeim, G. [2011], Consequences and institutional determinants of unregulated corporate financial statements: Evidence from embedded value reporting, *Journal of Accounting Research*, 49(2).
- 上野雄史 [2015]「EV の適用拡大とその有用性」『生命保険論集』第 191 号。